

県番号 27	学校名 松原市立松原第七中学校 外2校	19～21
--------	---------------------	-------

平成20年度研究開発自己評価書

研究開発の内容

1 教育課程

(1) 編成した教育課程の特徴

A 新教科「人間関係学科(HRS、あいあいタイム)」の創設

新教科研究開発の特徴

- ・松原市立松原第七中学校区(以下松原七中校区とする)の全児童生徒を対象に指導した。
- ・松原七中校区の全教職員がその研究開発に携わり、全教員が指導にあたった。
- ・幼・小・中11年間で育成するスキルを12のターゲットスキルを定めた。
- ・参加体験型(ワークショップ)の学習スタイルを中心に取り組み、ファシリテーションにより、児童生徒の自己肯定感、自己効力感を高め、社会的有用感につながっていくことをめざした。
- ・幼・小・中11年間の流れの中で、「ソーシャルスキル」「出会いと気づきの学習」を系統的に学び、力を育むことができるプログラムをめざした。
- ・ストレスマネジメント、教育相談などの心理学的手法やグループアプローチなどに関する先行する研究や実践の成果に学びながら、行事や道徳の時間・特別活動・総合的な学習の時間などと結びつけて研究開発を進めた。
- ・市民性を身につけていくために、アサーティブな考えと行動から公平・公正の考え方や相手を尊重できる共感性を学び、ディベートの手法などを活用し、対立を解消していくためのロールプレイ等に取り組んでいくことで「アサーティブな人間関係調整力」の育成をめざした。

新教科カリキュラムの作成

- ・校内授業研究、校内研修、松原第七中学校区人権教育研究会の公開授業、校区研修、校区プログラムプロジェクトなどを通じ、七中においては、これまで研究開発した「人間関係学科」のカリキュラムを改善し、恵我小・恵我南小においては、「人間関係学科」のカリキュラム案を作成するための、プログラムづくりを行ってきた。

B 不登校生等を対象とした「ほっとスペース」の教育課程編成

不登校生等への支援体制の強化

- ・不登校生等支援会議、「こころプロジェクト」等を通じて、継続的に不登校生等の現状把握、支援目標づくり、校内連携組織の点検活動などを行った。
- ・不登校生等への「こころ支援」「体験支援」「学習支援」を教職員、関係諸機関との連携のもとで実施し、必要に応じて保護者に対するソーシャルサポートをコーディネートした。
- ・校区不登校児童生徒支援会議において、年間欠席日数10日以上の子どもの引き継ぎと登校状況の把握をおこなってきた。

「ほっとスペース」での教育課程編成

- ・個に応じた教育課程を編成するよう工夫した。

- ・体験学習を中心とした人間関係学科の充実を図った。
- ・合科的指導方法を実践した。

(2) 教育課程の内容は適切であったか

以下の理由により、教育課程の内容は適切であった。

人間関係学科の取り組みに関係する児童・生徒対象のアンケートの項目については、下記のとおりである。

小学校では 人間関係学科(あいあいタイム)授業後、毎回のアンケートの平均より

「あいあいタイム」は楽しかった。(恵我小1～6年 平均)	97.8%
「あいあいタイム」は楽しかった。よくわかった。(恵我南小1～6年平均)	96.2%

中学校では 人間関係学科(HRS)の自己評価 - 2学期末 - より

人間関係学科の内容はよく分かった。	88.2%
人間関係学科の学習で、今までに気づけなかったことを学ぶことができた。	81.7%
人間関係学科で、人とのつきあい方に関心が高まった。	73.2%
人間関係学科で学んだことを、普段の生活に役立てた。	43.9%

体をつかった参加体験型学習(ワークショップ)を通じて、興味・関心を広げることができる教科学習を展開した。

11年間に獲得させたいターゲットスキルを以下のように設定し、取組を始めた。これに基づいて取り組んでいくなかで、小学校と中学校との接続の観点からプログラムを研究開発する必要性が見えてきた。

	幼稚園	低学年	中学年	高学年	中学生
自己信頼					
自己管理力					
感情対処					
コミュニケーション力					
対人関係					
ストレス対処					
ピア・プレッシャーへの対抗					
時間管理					
境界設定					
決断と問題解決					
計画性					
情報活用力					

道徳の時間・特別活動(学校行事・学年行事)・総合的な学習の時間と結びつけて、取組を進めていくなかで、人間関係づくり(集団づくり)や行事に生かせたり、目標の達成にプラスとなった。

(3) 授業時間等について工夫

設定したスキルを子どもたちに獲得させるために、学習期間を定めたパッケージ方式をとった。

2 指導方法・教材等

(1) 実施した指導方法等の特徴

指導方法の特徴

- ・体をつかったワークショップを通じて、子どもたちが参加体験できる指導方法を基本としたプ

プログラムを開発した。

- ・子どもたちの主体性や創造性を高めるためにロールプレイの手法を取り入れた。
- ・パッケージ方式のプログラムを作成した。
 - a)パッケージのねらいを明確にし、そのねらいを具体化するために、1パッケージ3～5時間で授業を組み立てた。
 - b)1時間毎の始めにウォーミングアップとして、体や気持ちをほぐすアイスブレイキングなどの手法も採り入れた。
 - c)参加体験型学習の核となる毎時間のエクササイズに先立って「ねらい」を共有し、ルールを徹底させるためのインストラクションに取り組んだ。
 - d)スキル学習の時間では、モデリングなどの指導方法も採り入れ、子どもたちの観察力を高め、体験学習として子どもたちが「般化」できることをめざした。
 - e)授業を展開した後、シェアリングとして「ふりかえり」の時間をとり、子どもどうしの「気づき」から「学び」を共有できるよう努めた。

教材等の特徴

- ・先行研究や先進的実践、大阪府教育委員会の「いじめ対応プログラム」などを参考にしながら、子どもたちの実態を考慮し、アレンジまたは独自に作成した教材を活用した。
- ・授業の終わりに記入する「ふりかえりシート」における子どもたちの「ふりかえり」や「気づき」を教材開発に生かすとともに、データ集積することを通じて、子どもたちの変化や成長をいち早くキャッチするように努めた。

授業の形態等の特徴

- ・基本的には、クラスを基盤とした授業であるが、場合によってはクラスを2分割した少人数指導や学年全体で実施することもある。
- ・複数教員で指導にあたることをめざした。担任・副担任のペア、学年教員のペアなど、プログラムの内容に応じて変化させている。

(2) 指導方法等は適切であったか

- ・「学校生活調査」や「ふりかえりシート」などを通じて、人間関係学科実施直後や学期毎の子どもたちの「気づき」や「学び」を、子どもたちや教員が共有することをめざした。そのプロセスを通じて人間関係学科による子どもたちの中に生まれてきた「規範」や「ルール」を教員は大切にしてきた。その結果、次項で述べているように、学校生活楽しさ度、悩み、ストレス反応、コーピング等に実施の効果が表れてきた。よって、指導方法は課題をかかえながらも適切であったと言える。

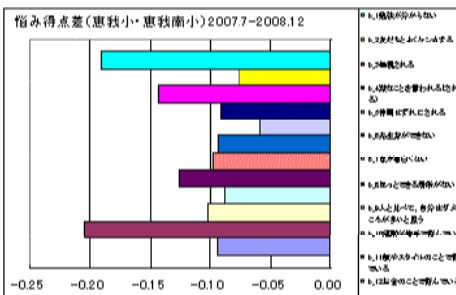
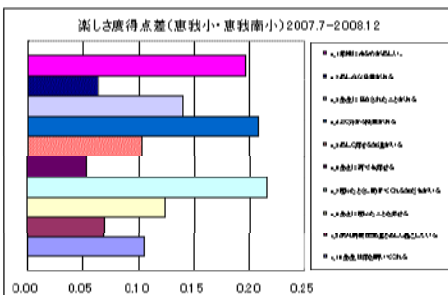
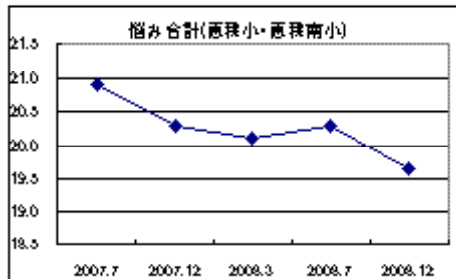
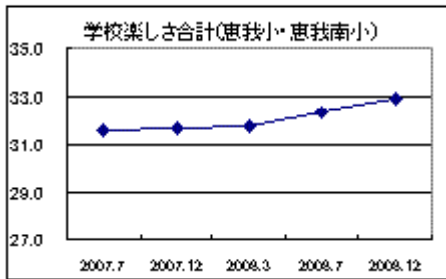
実施の効果

松原七中では2003年度より、恵我小・恵我南小においては2007年度より、人間関係学科の効果測定のために6つの領域からなる「学校生活調査（小学校4件法、中学校5件法）」というアンケート調査を児童・生徒対象に実施している。項目は、a 学校楽しさ度（満足度）b 悩み c ストレス反応 d コーピング e ストレッサー f 自己肯定感（小学校高学年と中学校のみ）の6領域である。実施対象と実施時期は、小3～中3までは各学期末毎、小2は2学期から各学期末毎となっている。その他、人間関係学科実施直後の「ふりかえりシート」、各学期末に中学校で実施している「HRS自己評価」、学校教育自己診断（児童・生徒用）がある。保護者に関しては、人間関係学科アンケート（保護者用）、学校教育自己診断（保護者用）を、教員に関しては、人間関係学科アンケート（教員用）、学校教育自己診断（教員用）をそれぞれ12月に実施し、そのデータ集積から効果を測定している。

1. 児童・生徒における実施の効果

学校生活満足度（楽しさ度と悩みの数値の推移より）

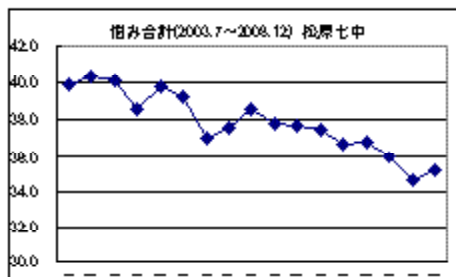
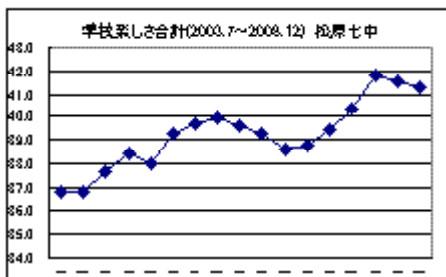
小学校においては、人間関係学科実施後の2007年7月から2008年12月までの恵我小・恵我南小の3年生から6年生までの全員の数値を合計し平均値を割り出した。学校生活への楽しさ度と悩みの数値の推移で学校生活への満足度をみた。楽しさ合計は増加し、それに比例して悩み合計が減少していることがわかる。



項目別に見ると、楽しさ度においては全ての項目が上昇し、「a1 学校に来るのが楽しい」「a4 よくわかる授業がある」「a7 困ったとき、助けてくれる友だちがいる」の3つの項目において、およそ0.2ポイントもの上昇を見せている。一方、悩み合計においても全ての項目において減少し、「b1 勉強がわからない」「b11 顔やスタイルのことで悩んでいる」の2項目につ

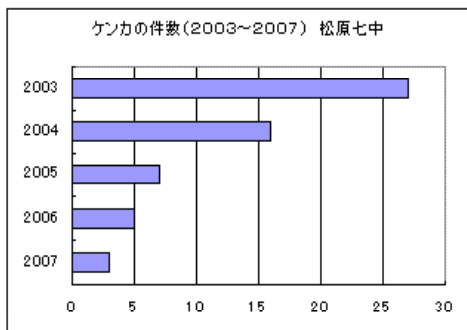
いては、およそ0.2ポイントも減少していることがわかる。

松原七中においては、研究開発の指定を受けて6年目ということもあり、2003年度から2008



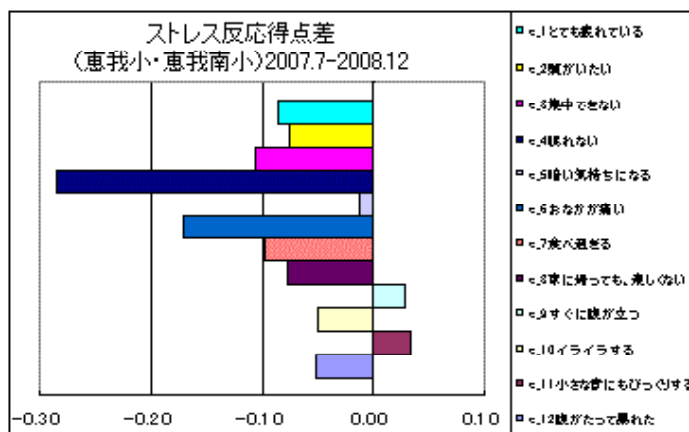
年度に至るまでの推移をグラフにした。途中、研究開発がいったん絶えた2006年は、移行措置として人間関係学科の実施を20時間程度に抑えたということと、教員の

大量異動等が原因で、いったん楽しさ度の数値は減少しているが、昨年改めて校区として研究開発に取り組み始めた段階で上昇し始め、昨年3月調査では、今までの最高値である42ポイント(50点満点)にまで到達した。2003年度からおよそ5ポイント上昇し、質問が10項目なので、1つの質問につき0.5ポイント上昇したことになる。人間関係学科実施後、楽しいと思える学校づくりをめざしてきた結果が、生徒たちの学校生活に対する満足度を増し、悩みを減らしてきたと言える。左のグラフは松原七中における暴力がからんだケンカの件数であるが、年を追うごとに減少してきた。



かつては、市内でももっとも生活指導面で厳しい状況だった松原七中であったが、現在では、非常に落ち着いた学校に変容している。この人間関係学科の取組の成果を校区小学校と共有することにより、松原七中校区が豊かな人間関係に満ちあふれた地域に発展していくことを願うことが、校区として取り組んでいく意義である。

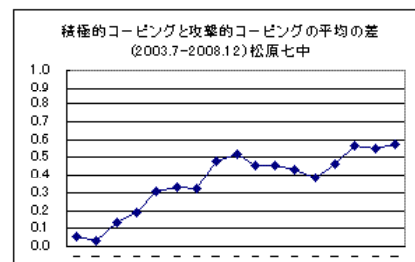
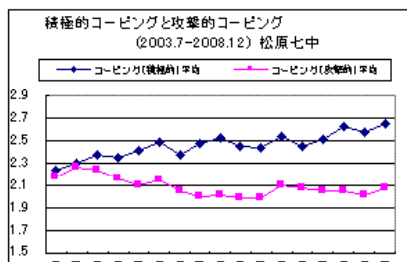
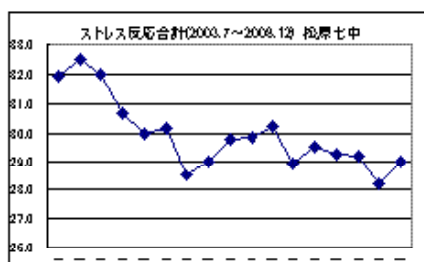
ストレス対処

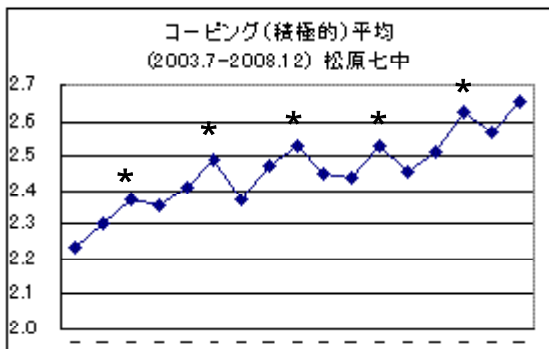


先行した松原七中の研究開発の結果から明らかになったことは、子どもたちの悩みやストレスは、心身及び行動面に大きく影響を与え、ストレス反応として子どもたちの中に表れるということだった。悩みやストレスとして子どもに認知的に自覚される事象と「c1 とても疲れている」「c10 イライラする」などの生理的・精神的・行動的に表れてくる事象との間には強い相関がある。(松原七中、2008年12月調査においては、悩み合計 - ストレス反応は「Pearsonの相関係数で0.605、ストレス合計 - ストレス反応は0.586、1%水準で有意〔両側〕」という結果を得ている。)上のグラフは、恵我小・恵我南小のストレス反応における得点差である。12項目中10項目においてマイナスになり、合計点(5件法、60点満点)においては、0.85ポイント減少し、ストレス反応は減少している。しかし、コーピング差(積極的コーピング - 攻撃的コーピング)には明確な成果があらわれておらず、単発的な学習だけではなく、小学校における体系的なストレスマネジメント学習が必要とされていることがわかる。

松原七中においては、1年生の2学期に、ストレスマネジメント学習を展開し、その後、アサーティブな表現や主張、感情対処、リフレーミングなどの学習へとつなげている。その結果、下のグラフのようにストレス反応合計は減少傾向にあり、積極的コーピング(「d1 スポーツで発散する」「d2 友だちに相談する」「d3 家族に相談する」「d4 先生に相談する」の平均)と攻撃的コーピング(「d5 モノにあたる」「d6 人が嫌がることを言う」「d7 人を叩く」の平均)の差が広がっている傾向にある。2008年12月の最新調査では、その差が0.572とこれまでの最高値となっている。さらに、積極的コーピ

松原七中においては、1年生の2学期に、ストレスマネジメント学習を展開し、その後、アサーティブな表現や主張、感情対処、リフレーミングなどの学習へとつなげている。その結果、下のグラフのようにストレス反応合計は減少傾向にあり、積極的コーピング(「d1 スポーツで発散する」「d2 友だちに相談する」「d3 家族に相談する」「d4 先生に相談する」の平均)と攻撃的コーピング(「d5 モノにあたる」「d6 人が嫌がることを言う」「d7 人を叩く」の平均)の差が広がっている傾向にある。2008年12月の最新調査では、その差が0.572とこれまでの最高値となっている。さらに、積極的コーピ

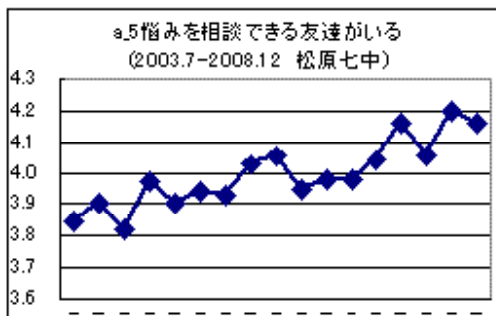
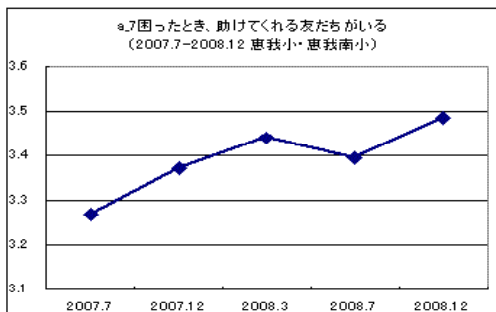




ングがいかにか、システムティックに育成されているかをあらわしているのが、このグラフである。*印をつけた調査は、全て3月調査である。一つの年度には、学期末での調査なので7月調査、12月調査、3月調査の3回の調査があるわけだが、年度の最終調査である3月調査が、全てその年度の最高値を出していることに注目したい。3年生が卒業し、新たな1年生を迎える。そして、新2年、新3年ともにクラス替えがあり、新たな人間関係づくりが始まる。従って、積極的コーピングの数値は

7月調査で一旦下がるのであるが、また3月調査に向けて上昇していく。途中、教員の大量異動があったにも関わらず、差月調査の数値が上昇し続けているということに、生徒・教員ともに「伝統」としてのレベルで受け継がれ、引き継いできた結果であることが見いだせる。

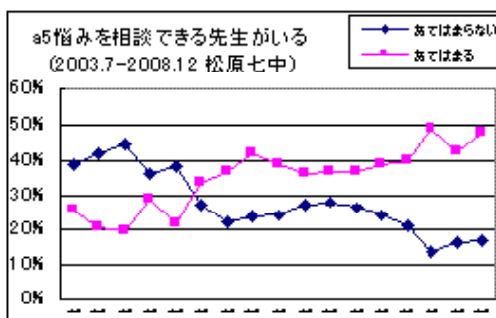
子どもどうしの関係



小学校の「a7 困ったとき、助けてくれる友だちがいる」と中学校の「a5 悩みを相談できる友だちがいる」のグラフである。「困ったときに助けて

くれたり、悩みを相談できる友だちがいる」ということは、「友だちと楽しくすごす」以上の関係性が問われることである。その数値が平均で恵我小・恵我南小においては3.48(4件法) 松原七中においては4.16(5件法)[ともに2008年12月調査]に至っているところに、子どもどうしの関係性が強まってきていることうかがえる。

子どもと教員との関係

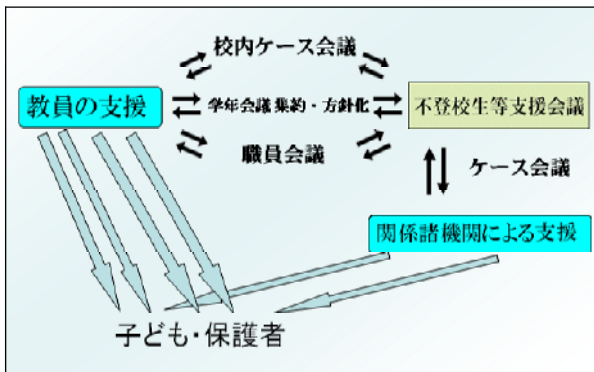


子どもと教員との関係は、小学校では「a3 先生にほめられたことがある。」の数値が上昇し続けている。人間関係学科の目標のひとつである

自己肯定感を高めていくために、子どもたちを評価しフィードバックを返していくという作業を、恵我小・恵我南小ともに人間関係学科だけでなく、全領域において行ってきた成果である。松原七中では、「a5 悩みを相談できる先生がいる」の項目において、2005年3月調査より「あてはまる」「あてはまらない」の数値が逆転し、「あてはまる」が「あてはまらない」の差が大きく開きつつある。いじめ・不登校の未然防止の観点での相談活動の充実の成果であると言える。

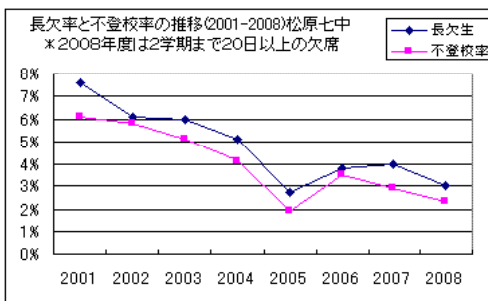
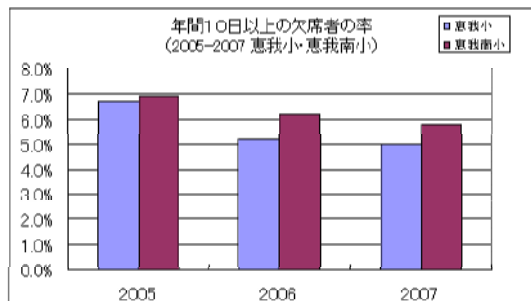
不登校への取り組み

不登校の未然防止のための人間関係学科の開発とともに、研究開発の課題の一つとして不登校生等へ



の支援がある。左のチャートは、松原七中校区の不登校支援をあらわしている。各校で校内不登校生等支援会議を設置し、校区不登校生等支援担当者会議、校区不登校児童生徒支援会議を開催し、校区で一貫した不登校生等への支援と、関係諸機関と連携した支援をしている。教員の支援は、担任のみに任せるのではなく、学年代表と担任が情報を共有し、学年会議での話し合いを経て各校の不登校生等支援で話し合われる。不登校生等支援の柱は校内不登校生等支援会議である。学校

の中心メンバーはもとより、学年代表、養護教諭、カウンセラー、アドバイザーなどの各校の支援スタッフが結集し、支援が必要な子どもたちへのアセスメントと支援策を協議していく。結果として、管理職も含めた複数の教員の支援とカウンセラー・関係諸機関から支援が必要な子どもへ届くことになる。下のグラフは小学校における年間10日以上欠席者の率のグラフと中学校における長欠生と不登校生の率のグラフである。

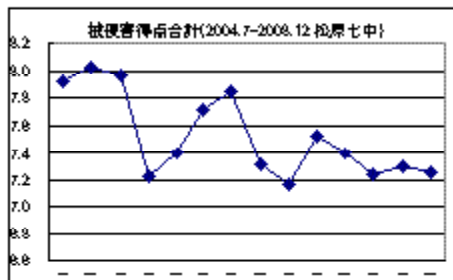
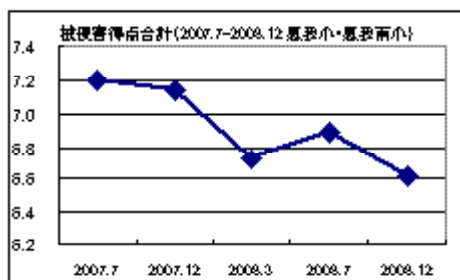


の率のグラフである。恵我小・恵我南小では、年間欠席日数10以上の児童生徒を支援が必要な子どもとして位置づけ、遅刻の実態も加えて



把握していくことで、中学校へつないでいくという取組を行っている。松原七中では、病気などの長欠生も支援が必要な子どもとしてとらえ、支援を行ってきた。不登校生等の学校復帰のための家庭と学校との中間ステーション「ほっとスペース」(写真左)がある。現在1名(3年女子)が利用しているが、入学後すぐに引きこもってしまった彼女が2年生の10月より「ほっとスペース」での勉強をはじめ、現在では部分的ではあるが学級への復帰を果たしている。

いじめ未然防止の取組

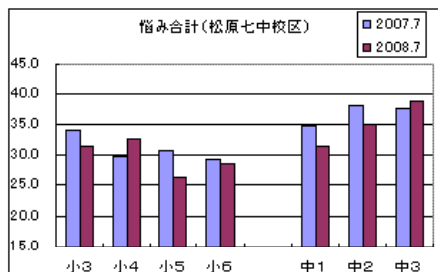
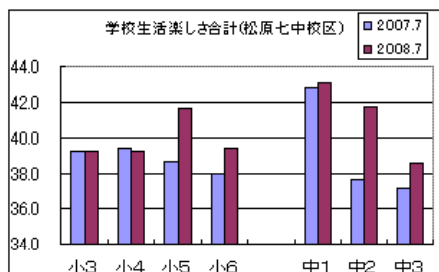


学校生活調査の中にある「b4 無視される」「b5 嫌なことを言われる(される)」「b6 仲間はずれにされる」「e17 人からの陰口、うわさ話をされること」を合計した点数を被

被害者得点(小学校16点満点、中学校21点満点)として位置づけて、その推移を見た。小学校も中学校も増減を繰り返しながらではあるが減少傾向にあることがわかる。松原七中では、昨年度から10月の教育相談(二者懇談)に向けて「ほっとアンケート」という、子どもの生活度、被被害度、キャリア意識をはかるアンケートを実施している。学校生活調査の被被害者得点とも兼ねあわせて、いじめ未然防止に関わって、子どもたちと教師がつながる手段として活用している。日常の相談活動とあいまって、子どもたちと教師のつながりが強まっていくことで、子どもたちの中におけるいじめに対して、大きな抑止力となっていることは間違いない。さらに、子どもたちは、一つひとつの人間関係を構築していく

作業に人間関係学科を通じて取り組み、自立する力と人間関係を調整する力を育てていく。そのプロセスを通じて内発的なエネルギー（エンパワーされた力）を生み出し、子どもたちの集団内部で、いじめに関わるような事象を排除し、集団を浄化させていく力をつけてるのである。まさに、人間関係学科は、生徒指導の観点で開発的予防的な「ガイダンスカリキュラム」として機能していると言える。

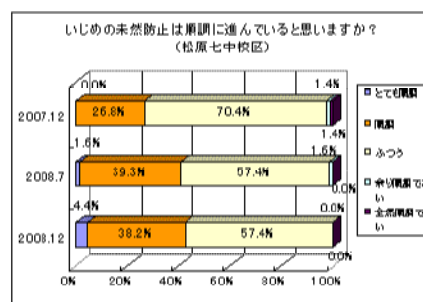
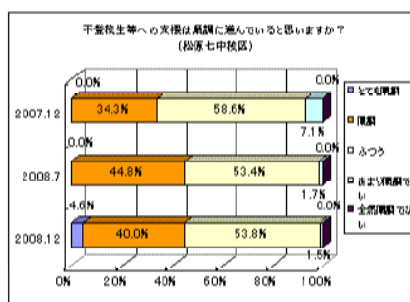
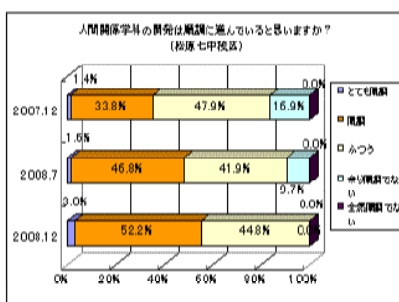
小中の段差



これらの2つのグラフは、学校生活調査の2007年7月調査と2008年7月調査において、小学校の数値を換算(4件法 5件法)した数値と中学校の数値を並べたものである。松原七中の事例を

見てみても、小学校から中学校へ上がった段階で、すぐに不適応を起こし不登校に陥ってしまう子、夏休みを過ぎて、勉強や人間関係のストレスで不登校に陥ってしまう子、など、小中の段差(急激な変化)により中学校1年生で不登校に突入してしまう子は多い。2年分のデータだけなので早計かもしれないが、この2つのグラフから不登校に突入していく契機を読み取ることができる。まず、学校生活楽しさ度から言えることは、小学校から中学校へ上がった段階で急上昇しているという点である。まず、複数の小学校から入学してくるということ、学級担任制から教科担任制への移行、「勉強」重視の学習スタイル、クラブ活動から部活動へなど、子どもたちの世界は一気に広がり、楽しさや期待感が高まっていく。しかし、少数ではあるが、その一気上昇に乗り切れずに、人間関係づくりの苦手な子どもは、不登校に陥ってしまう可能性が高いということである。そして、中学校に入ると同時に、はっきりとした段差を伴って上昇していく悩みの数々が集団全体に追い打ちをかける。何もしなければ、不登校生を次々と生み出す条件は中学校にはあると言える。2008年秋、そんな小中の段差を埋めるべく、人間関係学科における小学校と中学校のコラボレーション授業に取り組んだ。中学生が小学生を歓迎するという形で「小学生歓迎ポスター」を見ること・伝えること・聴くこと・訊くことを織り交ぜた「コピーゲーム」を実施した。人間学科の授業を通じてピア・サポート的な学びと気づきが得られ、小学生の子どもたちの中学校への不安を沈め、先輩に対する信頼を深めた画期的な授業だったと言える。

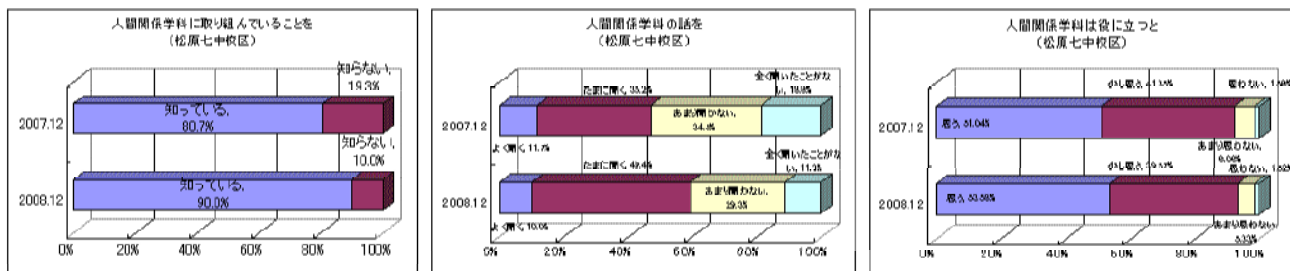
2 教職員アンケートから



これまで、2007年12月、2008年7月、12月と恵我小・恵我南小・松原七中・(恵我幼稚園)の教員を対象に研究開発アンケートを実施した。その中から研究開発の中心課題に関わる3項目について見ていくと、3項目ともに本年度になって、「とても順調・順調」の項目の数値が増え、「あまり順調でない・全然順調でない」の項目がほぼ0%という状況になっている。まだまだ、3校間の温度差があるとは言え、研究開発はほぼ順調に進んできていると言える。特に2008年9月から11月にかけては、校区内で学校を越えた教員の交流を様々なレベルで数多く持ったこともあり、研究開発の校区

としての進展を多くの教員が感じている。

3 保護者アンケートから



2007年12月、2008年12月と2回にわたり、松原七中校区保護者対象にアンケート調査を行った。「人間関係学科に取り組んでいることを知っていますか？」という質問に関しては、約10ポイント上昇し90%の保護者の認知を得た。「人間関係学科の話を家庭で子どもから聞いたことがありますか？」という質問では、約12ポイント上昇し約60%の保護者が「よく聞く、たまに聞く」と答えている。そして、「人間関係学科は生活に役立つと思いますか？」という質問に至っては、約2ポイントの上昇ではあるが、全体で93%の保護者が「思う・少し思う」と答えている。文章表記の部分では、学校に対して「素晴らしい時間だと思っています。」「いつも新しい工夫をされ、その時々に応じてタイムリーだと思うような内容を開発されていることに驚き、感激しています。」「将来ずっと続いていく人間関係、人と人とのつきあいが一番大切で難しいと思います。」「勉強以外の大切な取組を経験させて欲しいと思います。」などの肯定的評価の意見がほとんどを占めていた。しかし、ほんの一部ではあるが、「時間割をさいてまで教えなければいけないことでしょうか？」などという誤解に基づいた否定的意見もあったが、明らかに学校側からの説明不足が原因であり、アカウントビリティの徹底が問われていることがわかる。

研究実施上の問題と今後の課題

1) 実施上の問題点

校区で一貫した取組をめざし、継続した内容創造のための、校内・学校間の諸会議の設定の難しさ。
 教員間、学校間における意識の違いを、プラスに作用させることの難しさ。
 校区での成果を客観的に評価し、成果を発信しつつ内部に返していくことの難しさ。

2) 今後の課題

七中校区として11年間のカリキュラムづくりを行う。本年度明らかになった人間関係学科の主になる領域を、いかに順序立てて配列し、中学校3年生の最終段階にもっていくかということ、校区の教員全員で考え、人間関係学科実施の指針を作成する。

校区としての不登校生等支援といじめの未然防止に関わって、校区で一貫した内容を創造する。効果測定に関して、本年度小学校で根づいてきたデータ収集と基礎データづくりを、各校の課題を明らかにしていくための、積極的效果測定へと移行させていく。

人間関係づくりを地域のものとしていくために、地域人材の活用や、地域への発信を行う。

子どものファシリテータとしての資質向上をはかるための研修を実施する。

研究開発の内容に普遍性を持たせていくために、諸研究会への積極的な参加や、松原七中校区研究開発HP (<http://www.e-kokoro.ed.jp/matsubara/matsu7/08koukuukenpatsu/koukuhyoushi.htm>) 等を活用し、外部と連携を図る。

以上を推進する研究組織の充実と改編をめざす。

平成20年度 運営指導委員会

名 前	所 属	職 名
西井 克泰	武庫川女子大学大学院	教 授
古川 知子	大阪府教育委員会 児童生徒支援課 子ども支援グループ	主任指導主事
神崎 雅子	大阪府教育委員会 小中学校課 教務グループ	指導主事
島岡 伸行	大阪府教育委員会 小中学校課 生徒指導グループ	指導主事
近藤 欽一	松原第七中学校区	研究開発学校 アドバイザー
前田 正人	松原市地域教育協議会	会 長
池田 真季	松原市教育支援センター	相談員
土師 佳子	松原市立恵我幼稚園	園 長
前崎 卓	松原市教育委員会	教育推進課課長
石田 勝也	松原市教育委員会	学校教育部参事
稲垣 久代	松原市教育委員会	指導主事
横田 雅昭	松原市教育委員会	指導主事